月刊 JMITU ディスカ

新型コロナ対応版

10月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ　グループ分会　2020年発行

No,430

２０２０年秋闘・年末一時金回答
構造改革について未だ未発表

通常であれば団体交渉を会社と対面で交渉していましたが、コロナの影響で今秋闘は、リモートを使っての交渉となりました。

会社「年末一時金については、第二四半期の発表までは回答できない。組合の要求しているコロナ手当てについては出来ませんが、６割強の方が在宅勤務を行っている。在宅は強制ではなく個別で光熱費や通信費がかかるわけでそこについては補助した方がいいと言うことで定額でなく、一日３００円支給する。組合のＨＰコンパスにリンク貼り付けについては、会社として認められない。」

組合「一時金について決算まで発表できないのはありえない、それ以前には数字が決まっているはずだ、周りの企業の様子を見るための回答延期はありえない。在宅だけでなく、このコロナの状況の中、電車での通勤というリスクもあるのだから手当てを出すべきではないのか。」

会社「在宅については一時的なもの育児介護だけだったものをコロナの影響で、数ヶ月このような状態なので制度として設けないわけにはいかない。

在宅にして、仕事がきちっと生産性が上がっているのかの見極めが会社としてまだついていない。」

組合「構造改革についてはどうなっているのか？１５０億円の内訳はどのようなものなのか？ＡＭを縮小していくと言う話もあるがどうなっているのか？」

会社「構造改革については、決まり次第発表していく。８月に立ち上げて、年度内には何もないという事はない。１５０億円についても言うはずです。ＡＭ事業は厳しい、プライズは回復してきているが都市型の店舗は厳しい。コロナがなくともＡＭ事業は厳しかった。」

組合「構造改革の発表があり、自分の職場はどうなってしまうだろうかと言う不安が、従業員にはあり、仕事が手につかない人達も居ます。１５０億円と言う具体的な数字が出ているのならそのときに内訳も話すべきではないか。人件費を削ろうとするのか、希望退職募集を行うのか。」

会社「希望退職については過去にも行っている。強制ではない稼げる分野、稼げない分野今年はコロナの中稼げるように何をしたらいいかやるべきことだ。ＡＭがなくなるという方針が出ているわけではない。構造改革発表については、ご指摘の件はごもっともです。同時に中身も話すが本来あるべきです。今後はそうしたいと思います。」

次回団体交渉１１月６日（金）

構造改革の中身がはっきりしていませんが、近いうちに発表があるということです。

希望退職募集の可能性もあり得ます。希望退職の時に、上司に個室に呼ばれ、「残ってもあなたの仕事はない」など退職干渉が行われることがあります。希望退職は、希望する人が手を上げるもの、希望しないのであればはっきり「辞めません」と言ってください。

4こま漫画

川﨑よしき

おはようございますご出勤ですか
在宅勤務が解除されて久しぶりの出勤です

はいチーズ・・笑って笑って
ウウム・
富士山をバックに
あなたを記念写真

おはようございます
ガラガラ
アラ
お出かけでしたの？

きみっ
イイ
富士山をバックに
あなたを記念写真を

今、旦那さんが会社に行きましたよ
ええ
在宅勤務が解除されたと聞いて

いいよ、いいよぉ
こっち向いてチーズ
富士山をバック
あなたを記念写真

実家の疎開先から帰って来たんですの
まあ・・

カ
ハハハ
・・・・

ショートショート

あの人

仙洞田一彦

春の終わり、秋までに小説を書きましょうと決めた。十月十八日に、作品を持ち寄ることにした。持ち寄るなどとは、パソコンのデータでやり取りできる時代にはそぐわない言い方かもしれない。しかしこの文学同人の半分は、原稿用紙に手書きだった。

高齢者は重症化しやすい。若い人よりも致死率が高い。そう言われている新型ウイルスコロナ禍の元での生活が十ヶ月経った。絶えず頭を抑えつけられているような、ずっと脅迫され続けているような生活に、慣れろと言われても慣れにくい。

十人もいない文学の同人はすべて六十歳以上。より正確に言うと七十歳前後ばかり。コロナの影響で、これを機に解散したらどうかという意見も出てきた。同人が出来て五十年くらい経つ。はじめはみんなこの地域に住んでいた。小説を書いてみようという同好の士が集まってできた。五十年も経つと、亡くなった人もいた。新しく入って来た人もいるにはいる。遠くに引っ越したのを機会に辞めた人もいたが、続けている人もいる。そういう人は、電車を乗り継いで集りに来る。コロナで、往復の電車も重荷になる。

同人はみんなで小説を書いて、年に一回、同人誌を発行している。それに掲載された作品を互いに批評し合う集まりを持つ。集まりが終わった後は、居酒屋に場所を移して、その続きをやる。同じ場所に集まって、実際に顔を合わせて、議論し、馬鹿も言う。集まる小説は、純情小説、大衆小説、私小説、時代小説、社会派小説と様々。噛み合う議論もあるし、全くかみ合わないこともある。最近では全くないが、血気盛んな頃は取っ組み合い寸前のところまで行った。

とにかく口角泡を飛ばし、かんかんがくがく、これが文学だなどと、息巻いていた。しかし今、二メートルも離れていたら、かんかんがくがくとはなりにくい。オンラインも無理。

小説は書く楽しみもあるが、その後の論議、というか一杯やりながらの話し、このたのしみも大きい。コロナで集まれなければ飲み会もなくなり、集りの魅力も半減する。

初夏の頃、何となく解散機運が生まれ、それなら今度の同人誌発行で終わりにしよう。流れがそんな風になった。会費だけが決まっていて、他に規約などというものもないゆるやかな集まりだった。事前に出席確認をするわけでもなし、欠席の連絡もあったり、なかったり。

二時からの開始には、私を含めて四人だった。

「おいおい、来るでしょう」

いつものことだから、そう言って始めようとした。

「あのう、安楽死ってあるでしょう」

「え、はい」

いきなりとんでもない話題から入るのもこの会の特徴かもしれない。あまり相手のいうことを聞いていないのではないかと思うが仕方ない。今自分が一番関心のある話題をいきなり口に出すのだ。本来なら、最後の同人誌を発行するまでの段取りとか、持ってきた自分の作品についてとか、だろうが。でも、そんなことを言ってもしょうがないから返事をする。

「そう言えば、何ヶ月か前、事件ありましたね」

私はサイトーさんに相槌を打った。サイトーさんは、現在の同人では最年長の女性だった。

「ですから、何か、同人を解散するのって、安楽死じゃないですか」

サイトーさんが言った。何だ同人の話かと私は思った。

「そりゃ、あなたが言い出したんじゃないですか」

向かいに座っていたナカムラさんが言った。三十人くらいは入れる部屋で四人だから、「密」ではない。耳も多少遠くなっているので、声も大きい。傍で聞いていたら喧嘩のように聞こえるかもしれない。

「わたし今度の作品を書きながら、連載にしようかなと思ったんです。ですから……」

サイトーさんも言い出した者の責任を少しは感じているのか、言いよどんだ。でも続けて言った。

「まだ、私って書けるんですよね。書けるのに、これで終わりっていうのは、何となく安楽死でしょ。生きようと思えば生きられるんだから。命ある限り小説を書きたい」

「たとえがよくありません。無理に安楽死にたとえなくてもいいんじゃないですか。ただ、連載を書きたいとおっしゃれば。お元気なこと」

年下のオダさんが、サイトーさんに皮肉もつけて言った。

「元気、元気」

サイトーさんは、皮肉にもこたえないで言った。

「ま、たとえは何であるにしても、同人の解散には反対ということですか」

私はサイトーさんに確認するつもりで言った。

「解散に反対というよりも、同人を続けましょうって、このように言った方が積極的で、表現としてはいいと思います」

オダさんが言った。私は、ウンウンと二度うなずいた。

誰かの携帯電話が鳴った。ナカムラさんの携帯だった。通話が終わると、ナカムラさんがあわてた調子で言った。

「あのほら、あの人、緊急入院したんだって」

「あの人って、今、名前聞いたばかりなんでしょ」

私が言った。ナカムラさんが手を振りながら答えた。

「あの人だよ。それに、そのお友達の、あの人が付き添いで行ったから、今日は来られないって」

「あの人がねえ……」

「サイトーさん分かったの」

「ええ、あの人でしょう」

返事はしたものの分かってない様子だが、私もみんなに合わせて言った。

「ああ、あの人と、あの人ね」